

示-134 CoQ₁₀による放射線肺炎の予防効果

—血中濃度による比較—

国立姫路病院 内科¹，放射線科²，
○牛田伸一¹，池上裕美子¹，石田 直¹，河南里江子¹，
中原由紀子¹，中原保治¹，松山榮一¹，糸氏英一郎²

我々は第26回肺癌学会総会において、CoQ₁₀が放射線肺炎の予防薬として有効であることを報告した。今回CoQ₁₀90mgを放射線照射開始1～2週間前より投与して、血中濃度を投与後14日目に測定し、放射線肺炎の発生を検討したので報告する。

昭和61年6月から昭和62年4月までに放射線治療のなされた肺癌患者10名を対象とした。全例60Gyのリニアック照射を受けたもので、照射後2ヶ月以上の経過を観察し得たものとした。

CoQ₁₀ 血中濃度が2.0 μg/ml以上を示したものとI群(5例)、1.0～1.99 μg/mlをII群(3例)、1.0 μg/ml未満をIII群(2例)に分けた。放射線肺炎の発生は、I群20%、II群33%、III群50%で、血中濃度高値群に発生率の低下傾向がみられた。放射線肺炎の発生した3例においても、発熱・咳嗽・呼吸困難等の臨床症状を認めず、ステロイドの投与はなされなかった。

CoQ₁₀は、放射線照射により生成されるfree-radicalのscavengerとして作用すると同時に、放射線肺炎の初期の肺小血管のうっ血及び肺水腫の出現をおさえる作用があると考えられ、放射線肺炎の予防薬として使用し得るものとする。

示-136

二重管カテーテル法による超選択的気管支動脈注入療法及び塞栓術

獨協医科大学胸部外科¹，放射線科²
○長井千輔¹，岩崎尚彌¹，知元正行¹，輿石匡司¹，
堀江昌平¹

肺癌化学療法の一部として行ってきた、気管支動脈注入療法による合併症の改善を目的として、二重管カテーテル法による超選択的気管支動脈カテーテル法を開発し、超選択性を利用して肺癌の動注療法や咯血に対する塞栓療法を行った。二重管カテーテル法による超選択性を得ることにより、局所に対する治療効果が改善されただけでなく、治療の安全性も向上することができた。動注した制癌剤は、CDDP 100mg/m²・NK-171 100mg/m²を基本的投与とした。

肺癌症例は16例に成功し、手術例が12例、非手術例が4例であった。手術例に対する効果は検討中であるが非手術例では反復投与による腫瘍縮小効果も良好であり、特に胸水の消失が著しいと考えられる。これは制癌剤の重要な投与経路となりうると思われる。咯血に対する気管支動脈内塞栓術(BAE)も試みており、10例の治療結果を検討し手術療法に変わる方法ともなりうると思われる。以上、二重管カテーテル法の治療応用について報告する。

示-135肺癌に対する術前化学療法、組織内濃度の検討

浜松医科大学第一外科¹，静岡県立総合病院呼吸器外科²
○鈴木一也¹，関谷 洋¹，八田峰夫¹，吉村敬三¹，
堀口倫博²，杉村久雄²，長島康之²

術前多剤化学療法を行い、抗癌剤の血清および組織内濃度について検討した。

【対象】全身状態良好な65才以下、腫瘍径が25mm以上の原発性肺癌で、絶対的非治癒切除を除いた20例。

【方法】UFT 600 mg/Dを術前1週間、更に手術の4日ないし5日前にADR 20 mgを静注、CDDP 50 mgを点滴静注した(同量のBAIを含む)。血清および切除された正常肺、リンパ節、腫瘍における濃度を測定した。

【結果】5FUの濃度(μg/g)は、血清が0.008±0.005、正常肺が0.021±0.014、リンパ節が0.037±0.028、腫瘍が0.068±0.049と腫瘍が有意に高い。

ADR濃度(μg/g)は、リンパ節が0.940±1.237、腫瘍が0.375±0.255、正常肺が0.122±0.141、血清が0.002±0.009で、それぞれ有意差がある。組織内濃度は動注で高い傾向にある。

CDDP(μg/g)の手術時の尿中濃度は1.545±0.447、血清濃度は0.66±0.181であり、リンパ節、腫瘍、正常肺の濃度は、ほぼ血清と同じであり有意差はない。組織内濃度は動注で高い傾向にある。

術前投与による副作用は、嘔気、嘔吐のみで、術後の縫合不全などの大きな合併症は認められなかった。

【結論】抗癌剤の感受性を調べることは、実地臨床ではいまだに難しい現在、その前段階として組織への移行性を検討することは重要であると思われる。

示-137気管支動脈内CDDP注入療法の効果と適応について

東北厚生年金病院呼吸器科

○斎藤純一，中井祐之

【目的】肺癌の集学的治療において、BAIは有用な化学療法の一手段と考えられる。切除不能非小細胞肺癌15例に対しCDDPを中心とした化学療法を施行したが、そのうち6例に対しCDDP-BAIを初回治療として用い、その効果と適応について検討をくわえた。

【方法】60年4月よりBAIを試みた症例は10例であったが、2例(76男，77男)は血管の蛇行にて血管造影不能で、また2例では気管支動脈確認不能で、結果として6例(15回)に施行した。BAIは大腿動脈よりSeldinger法にてアプローチし、カテーテルは5Fr Judkins-Lを用いた。これは侵襲を少なくし、繰り返して投与を可能にする目的と、動脈硬化著明な例においてもカテーテル先端がSoft tipである点より合併症発現の可能性を少なく出来るためである。

【結果】BAIの6例はいずれもPRが得られた。組織型は全例扁平上皮癌であった。BAI不能の4例は全身投与にて多剤併用療法を行なったが、3例でPRが得られた。BAIを4回施行し10ヶ月経過した74歳の例では、いずれも同側大腿動脈からのアプローチが可能であった。

【考案】CDDP-50mg-BAIは、全身投与と同程度の効果が得られ副作用の少ない点、及びCDDPの投与量を有効に用いることが出来る点より、高齢者においても積極的に試みたい治療法と考えられる。